

< 近代モダニズム再見 >
大大阪とアートの出会い

大阪府庁には赤い渦、大阪証券取引所ビルには青い三つの三角形（写真）が浮き出すという不思議なアート作品に象徴される「大阪・アートカレイドスコープ2007」が、今月21日まで開催中だ。

この催しは、アートを大阪の街や「場」とコラボレートさせ、互いの力を再発見、再発掘する試みである。美術、演劇、ダンス、音楽、デザインなど多様な表現を通じて、最新動向を発信したり、地元のアート系NPOとの協働を実現してきた。第四回目となる今回のテーマは「大大阪にあいたい」。船場を中心としたまちづくりの動きと連携し、市内16箇所で展開されている。

船場界限では、近代建築が主な舞台である。例えば、船場ビルディングの屋上では、大阪のおばちゃんを形にしたヒョウ柄の人虫たちが、神社前でまちの邪気払いをしている。芝川ビルでは、白い小人たちに導かれて、美しいオブジェや不思議な映像に出会える。ふだんは中に入りにくい近代建築物の壁やタイルも鑑賞できるから嬉しい。

さらに、阿倍野区の築七十年の近代長屋、古い寺社

や坂道のある上町台地、大阪駅北側貨物駅跡地の最先端の街づくりを目指した工事中の白いパネル壁もアートの舞台となっている。

「アートで、都市や建物に“ひだ”をつくることで、その場所の固有性や流れた時間を表し、街の可能性を引き出すことができる」と、プロデューサーの北川フラム氏は述べる。実際、美術館でなく他人の土地でアートを表現しようとする、思いやコンセプトを現場の持ち主に受け入れてもらわないと始まらない。人や場をまきこみコミュニケーションが生まれる。いろいろな事が繋がっていくプロセスで、まち、人、アートの力が引き出される。

歴史から未来まで、大阪の多彩な物語を再生する「場」を、カレイドスコープ＝万華鏡を楽しむように巡る実験劇場。まずは気楽に、地図を片手に街をあちこち訪ねてほしい。アート作品とともに知らなかった近代建築や街角の表情に出会うユニークな旅になるはずだ。

< 近代モダニズム再見 >

二〇〇四年夏、堺筋にあった旧三井住友銀行船場支店が解体された。由緒ある建物がいとも簡単に姿を消したことに、悲観と危機感をWEB上で共有したメンバーが集まった。それが「大オオサカまち基盤」だ。

呼びかけ人の岩田雅希さんは、「メールだけでもあまりに熱心な内容が多く、是非会いたいと会合を持った」と話す。建築家、造園作家、ライター、パティシエ、学生など異分野の顔ぶれが息投合。大阪が大大阪と呼ばれモダンシティだった頃の近代建築を見直し、積極的に活用する提案をして街づくりの基盤にしたいという思いをグループ名にこめ、活動を始めた。

まず、空き室になっていた、北浜の「印度ビルディング」でイベントを企画した。自らオーナーにかけあい、埃だらけの部屋を掃除し、近代都市や建築の専門家の協力を得たシンポジウムやサロンを実現した。半年後には、船場伏見町の芝川ビルで、「近代建築オーナーサミット」を開催。学問的な考察ではなく、オーナーや使用者側からの印象や苦労談などを引き出し、近代建築のオーナー同士がつ

ながる機会を創出した。一方で、大大阪時代に創建された消防署跡や銀行跡など、シャッターが下りたままの建築物の再生提案も行っている。

メンバー自身が楽しむために参画し、得意なことをするという暗黙のルールのもと、熱い思いが集結すると、大きな力になる。最近では近代建築が観光資源としても着目され、自治体や民間主催のイベントで、講師やガイドとして声がかかることが増えたという。

中心メンバーの三木学さんは「近代建築は、バブル期に建て替えのために数多く壊された。今経済がもどっているので、また貴重な建築物の解体が増えそうだ」と危惧する。今後は、戦後から昭和四十年頃に建てられた建築物に焦点を移していく計画だ。同メンバーの高岡伸一さんは、「時代とのつながりを感じながら、街の連続性を解析したい。ユーザーとしての視点こそ、街を魅力的に変えるはずだ」。このグループならではのアプローチに期待したい。

< 近代モダニズム再見 >

中南米風の装飾をあしらい、スパニッシュ瓦を葺いた外観に独特の雰囲気をもつ「芝川ビル」。地上4階地下1階のこのビルは、北船場の伏見町に昭和2年に竣工された。

江戸期から続く名家、芝川家の6代目芝川又四郎が、「火事・地震に強い建物を」と、本邸を鉄筋コンクリート造に建て替えたものである。完成後、昭和4年に「芝蘭社（ルビ：しらんしゃ）家政学園」という名の花嫁学校を設立。洋裁・和裁、生け花、お茶、料理などの授業があり、女学校を卒業した美しい着物姿の娘たちがこのビルに通ったという。

ところで、数年前まで芝川ビルは単なる「賃貸ビル」として稼働率を上げるための管理運用が担当社員により行われていた。しかし平成17年、現オーナー芝川能一氏と、近代建築を愛好する研究グループ「大オオサカまち基盤」との出会いが大きな転機となった。

古い建築物が大好きな研究メンバーは、当ビル倉庫で埃をかぶっていた資料の山から、竣工時や花嫁学校時の写真をはじめ貴重なものを数々発掘。またイベントを開催するため、4階空き室のペンキ塗りをを行い、

生まれ変わったその部屋でシンポジウムを実現させた。

そんな熱い思いに触れながら、芝川氏は「彼らを応援する中で、この建築の価値を再認識した。そしてビルを所有する千鳥土地株式会社ブランドとして、芝川ビルを磨き、活用しようと考えた」と語る。従来、使い勝手が悪い近代建築物は経営に対してマイナス効果だと理解されがちであったが、それを逆転させようという発想である。

「今後は、花嫁学校のイメージに統一する方向で、まちなみにも貢献しながら、ハード・ソフト両面でビルの魅力を向上させたい」と芝川氏。竣工時の姿を意識して床材や照明を更新、増築プレハブを取り去り、屋上テラス空間を復元した。21日にお披露目会を催す。「情報発信の場としても、ぜひ活用してほしい」。

坪効率だけを基準としない、近代建築のブランド化によるビジネスモデルへ。新たな挑戦がはじまっている。

船場の御堂筋と堺筋の間を南北に走る「三休橋筋」。歴史ある近代建築物や旧家、歩くのに心地よい幅12.7mの道幅、トウカエデの街路樹など、都心ながら落ち着いたあたたかみのあるストリートである。この三休橋筋の資源と可能性を発掘、発信する活動を行うグループが「三休橋筋愛好会」だ。

メンバーは、都市開発や建築の仕事に携わる男性5人で2000年5月に結成。プロジェクトごとにリーダーを決めるため、全員が代表者だという。

01年11月都市公団（現・都市再生機構）主催「船場げんき提案コンペ」に応募し、アイデア部門の優秀賞を受賞した。それをきっかけに、地元の活動グループとの交流が深まる。03年10月の「せんばGENKIまつり」では、三休橋筋の連続写真を自ら撮影し、20mのパネルを作成して紹介した。さらに「ええはがき展」三休橋筋フォーラム」など、他の活動グループと連携してイベントを開催。昨年の夏には単行本『大阪のひきだし』（鹿島出版会）を共著で出版した。

「まちづくり計画の提案だけでなくアイデアを実践する大切さに気づいた」とメンバーの一人は語る。

大阪市の道路部局が進める「三休橋筋プロムナード整備」事業にもスタート時点から関わり、まちづくりの視点やソフトの仕掛け、地元との連携の重要性を主張した。他にも依頼されて発信する機会が増えてきた。その成果か、「三休橋筋」のメディア登場回数が昨年は一昨年の3倍以上になった。

愛好会のメンバー同士、無理せず柔軟に、皆が楽しく関われることを大切にしている。それが活動を続ける秘訣だろう。今後は、三休橋筋の地元の表情が見えるような手作りの媒体を発信したいと、各自で構想をあたためているようだ。

今年6月9日、地元団体により三休橋筋の13本のガス燈が点火される。数年後には50本設置される計画だ。中之島公園から心齋橋、道頓堀界限まで、三休橋筋がつなぐことで回遊性が生まれ、歩いて楽しむ都心の魅力創出に向け、さらなる展開に期待したい。

写真：三休橋筋愛好会
左から梶木盛也さん、岸田文夫さん、篠原祥さん、根津昌彦さん、森山秀二さん